

小学校通常学級に在籍する発達障害児の 感覚処理・行為機能の特徴

Neuropsychological characteristics of regular classroom children with developmental disorders

1) 植草学園大学 2) 市川ことばの会 多機能型事業所ぷれも 3) 同いすみ・ぷれも
千田 直人^{1,2)} 田村 孝司³⁾ 野島 洋子 (ST)^{2,3)}

PI-7

背景

- 通常学級に在籍する発達障害の可能性のある子供の学びを支援すべく、障害者活躍推進プランの一政策として、通級指導の担当教師に向けたガイドが作成されている(文部科学省, 2020).
- その外部専門家たる作業療法士には、当該児童の個別的特徴の分析や課題に即した提案が求められており、神経学的発達特性の評価には、感覚統合理論を基に開発されたJPAN感覚処理・行為機能検査(JPAN)が用いられ始めている。
- しかし、小学校通常学級に在籍しながら放課後等デイサービスを利用する発達障害児の神経学的特徴について、JPANを用いて明らかにした研究は見当たらない。

【目的】

小学校通常学級に在籍する発達障害児の
感覚処理・行為機能の特徴を明らかにする。

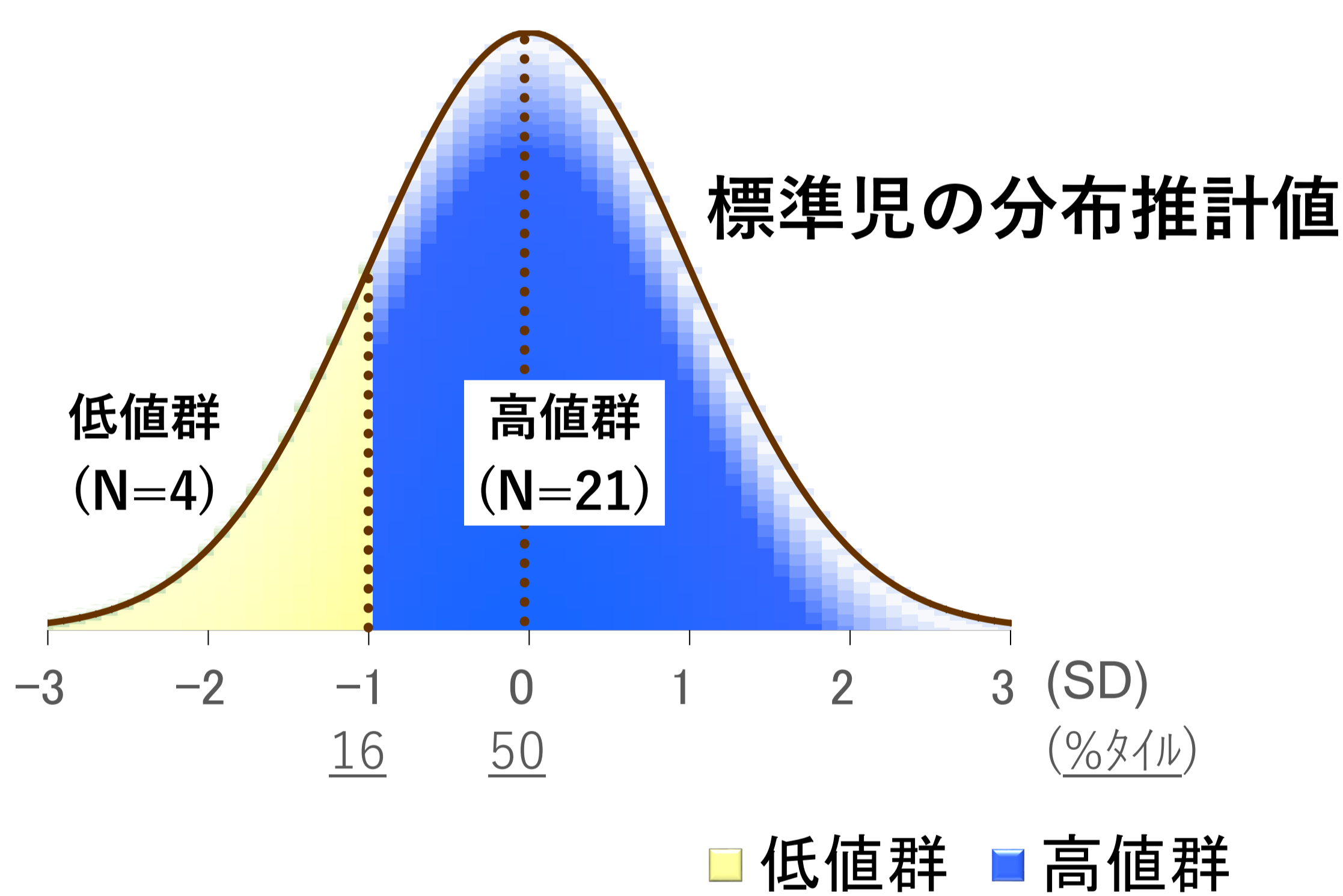
方法

- 対象: 当事業所の放課後等デイサービスを利用し、調査同意の得られた小学校通常学級に在籍する25名
(男22名/女3名, 年齢8.2±1.1歳, 1年生10名/2年生3名/3年生10名/4年生2名)
- 測定: JPAN Short Version 8項目(S-JPAN)

姿勢/平衡	抗重力姿勢(腹臥位伸展)	ひこうきパート2
	姿勢背景運動	クレーンゲーム
体性感覚	能動的な触覚探索	お宝さがし
	姿勢模倣	かっこよくまねしよう
行為	両側運動協調	おととと 仲良くおひっこしクロス けがして大変
視知覚	目と手の協調	ぶたさんの顔利き手誤数

- 集計: 年齢換算された5段階の%タイル値を用い、(0-5%, 6-16%, 17-25%, 26-50%, 51%-) -1.0SD値である16%タイルを基準に低値群(0-16%)と高値群(17%-)に分けて、項目ごとに各群の人数比を算出。
なお、正規分布上の推計人数比は低値群が4名の16%、高値群が21名の84%。

結果



S-JPAN各項目の群別人数比(N=25)

低値群の推計値(4名,16%)より乖離していた上位5項目

考察

- 結果より、小学校通常学級に在籍する発達障害児の感覚処理・行為機能の特徴には、**姿勢模倣や両側運動協調、抗重力姿勢運動、能動的な触覚探索の未熟さ**があることが示唆された。
→ 児童の主な困難感として挙げられる縄跳びや鉄棒・ダンス等の体育における身体図式や動作模倣、およびリコーダーやひも結び等の両手操作、座立位の良姿勢、鉛筆や箸等を扱う手先の力加減に関連していることが考えられる。
- 通級における合理的配慮に即した指導の体系化には、各々の個別的特徴を捉えることが重要といえ、学校教諭によって集団活動の場面で協調運動を評価する試み(川島ら, 2018)もなされている。
- しかし、生活行為の困難さを前庭・固有受容覚系の体性感覚や両側統合、運動の順序立てなどの神経学的な発達特性から分析しうるJPANの有効性も確認された。
- 教育・医療・福祉の連携が富に求められる昨今、子供の障害特性を十分把握し、課題に対する具体的な提案をなせる知見の蓄積が不可欠である。